

1986年度物性若手夏の学校の報告

ステック理論における「均一幅」の扱いに対し、再検討の必要性和、「均一幅」の意味について話していただいた。

萱沼氏は、準位交差のダイナミックスの現れる実験の必要性を提唱していたので、世話人として、実験的側面を support するために、発表者には実験系の方々を招待したつもりである。遠藤氏に関しては主な論点が「均一幅の理論」であるということで、多少とまどったが、基礎的な内容ではあるし、当日議論が hot になるのではないかと思ひ、あえて、氏の「均一場の理論」を話していただいた。

反面、実験的な面が手薄になり、理論とのつながりは、はっきりしなくなってしまった感があったのは残念であった。

(世話人 京大・理 川浦久雄)

特別企画 「物理屋への道」

- ① 若手物性研究者(院生)が、共通に感じている諸問題を整理し、議論する意図をもって発案された。
- ② 参加者の大半が成長途上にある院生だということもあって、内容は“若手はいかにして一人前の研究者になってゆくか”「物理屋への道」と決まった。
- ③ 現在、あがいている院生自身より、成長を一段落終えた研究者の方が冷静な見方が出来るのではないかと考え、3人の研究者(長岡洋介氏<名大>、光永正治氏<NTT>、沢田信一氏<NEC>)を講演者として御迎えした。
- ④ しかし、上記の内容で一般論を展開することは難しいので、御3人の成長体験(長岡氏はこれを「症例」という言葉で表現されたが)を vivid に語っていただくことになった。
- ⑤ また、全国物性院生あてにアンケートを行い、物性院生像を客観的につかもうとした。
- ⑥ 夏の学校当日は、アンケート報告・講演・フリートーキングの順に進められた。

(9:30 am - 1:00 pm.)

当日の話題をいくつか拾いあげてみると、

講演・フリートーキングでは、アンケート報告の中で、指摘された「自分の研究(テーマ)に学問的・社会的意義はあるか、その具体的中身は？」について、各講演者に触れていただいた。3人3様の見解(「将来の技術の基礎になる<光永氏>、新たな文化を創造している<沢田氏>、教育を通じて社会に還元される<長岡氏>。)が述べられたが、皆さんに共通

していたのは、「研究(テーマ)は、まず、自分自身が満足できるものでなくてはならない。」という信念であった。

また3人の方とも、アメリカのカリフォルニア大で一定期間研究なされたこともあって、アメリカの研究(者)と日本の研究(者)の違い、アメリカの大学院教育と日本の大学院教育の違いなどについても感想が出された。

企業と大学での研究スタイルの違いについては、企業の御2人から、予算、規模の違い、研究者の気質の違い、研究業績の評価の違いに注目した興味深い話が出た。

概して3人の講演者の話のうまさやそのパーソナリティも手伝って、講演自体は成功したと思うが、進行上のまずさや、予想外に多人数が参加したこと(一時は200人を超えた!)などもあり、院生の側のフランクな意見を引き出せなかったことが残念であった。次回の特別企画に期待したい。

- ⑦ 御忙しい時間を削いて準備局の勝手な注文に心良く答えて下さった、3人の講演者の方に厚く御礼申し上げます。

(文責 井川淳志)